【海外留学レポート】

第2の母国オーストラリアと出会う

-アデレードでの高校・大学留学生活から-

Meeting My Second Home Australia:
Study in High School and University in Adelaide

南オーストラリア大学　健康科学部（作業療法学科）卒　上　梓

KAMI Azusa

(Graduate, Bachelor of Health Science (Occupational Therapy),

University of South Australia)

キーワード：オーストラリア、海外留学、作業療法

はじめに

留学当時（2005年）、南オーストラリア州の州都「アデレード（Adelaide)」を知っている日本人はまだまだ少なかった。しかし、2015年には、英雑誌エコノミストの実施する「世界で最も住みやすい都市ランキング」で、1位メルボルン（オーストラリア）や3位バンクーバー（カナダ）に次いで5位に入るほど、アデレードの魅力と人気が高まっている。生活費が安価で、治安が良く、他都市と比較して日本人が少ない、また国際的に評価の高い教育システムが完備されていることから、世界中から留学生が集まる都市へと変化している。そんな街アデレードに、私は16歳から23歳までの7年間、留学することとなった。アデレードで高校と大学を過ごしたことは、かけがえのない貴重な経験であり、一生忘れることのない思い出がたくさんできた。帰国して5年経過した今、心底思う。本稿では、私が留学に至った経緯と7年間の現地での生活について、お話ししたいと思う。

留学を決意

留学の意思を固めた出来事が、2つあった。1つ目は、小学校5年生にさかのぼるが、父親の仕事の関係でアメリカ・ニューヨーク州に住んでいた。9か月間という短期間で、また日本人学校に通っていたこともあり、英語が流暢に話せるまでにはいかなかった。しかし、その9か月間がその後の私の英語に対する考え方に大きな影響を与えたのは確かで、中学校進学後、多くの同級生が苦手意識を持つ英語学習に対して、私は抵抗が全くなかった。また、9か月間の日本人学校での生活でできた友達と、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

帰国後も 1 年に 1 回程度の頻度で再会していたことが大きい。もう 1 つの出来事は、中学 3 年生の時、学校で「卒業生の職業紹介」という総合授業が行われ、短期間でも留学を経験することが自分の将来のキャリアに良い影響を与えるという話を聞いた。将来は医療福祉系の仕事に就きたいと当時から考えており、日常的にあまり使わないにしろ、福祉分野においても英語は必ず必要になると考えた。また、自分の中でなにか 1 つでも得意なこと、自慢できる経験がほしかった。両親と担任教諭と相談を重ねた結果、高校 1 年生を準備年として、高校 2 年生の 1 年間、留学することを決意した。大学受験を控えた高校 2 年生で留学すること、さらに中学 1 年生から一緒に過ごしてきた友人達と離れることについては、最後の最後まで悩んでいた。両親と担任はもちろんのこと、前述の卒業生や留学経験者に話を聞き、留学することのメリット・デメリットを検討したうえで、短い期間でも留学を通して自分自身に挑戦することに意義があると感じ、留学を決意した。

留学支援会社に登録したことで、出発までの様々な手続きをサポートしてもらえ、その 1 つに留学先での学校の選定があった。世界でテロや感染症が相次いだこともあり、治安を考慮したうえで複数の都市が候補としてあがり、その中の 1 つにアデレードがあった。アデレード市内においても留学生を受け入れる州立・私立高校がたくさんある中で、私は留学生に対する支援、運動・部活動に積極的に取り組むアデレード高校を希望した。準備年（高校 1 年生）はあっという間に過ぎ、2005 年 5 月、アデレードへ出発した。

留学生のための英語クラス

私が通学していたアデレード高校の「アイセック（Intensive Secondary English Class：ISEC)」は、留学生だけで英語で学ぶクラスであり、算数（数学)、英語、理科、社会（歴史)、総合などの科目について、1 日 6 時間授業が行われた。小学校で習うような簡単なことでも、英語で伝えようとすると困ってしまうことが多々あり、毎日が学びであった。例えば、算数の「足し算」「引き算」「掛け算」「割り算」を英語で何と言うのか、知っているようで知らないことばかりで、留学 1 週間で、自分の英語力の無さに愕然としたことを覚えている。当時、私が在籍したアイセックには合計 15 人ほどの留学生がおり、日本人は私を含めて 2 人、ベトナム人 2 人、その他は中国人だった。多くの留学生がアイセックから学校生活をスタートし、その後、メインストリーム（mainstream）と呼ばれる通常学級で、現地の学生やアイセックを卒業した留学生と共に、数学、生物、化学、体育などの通常の授業を受ける。1 年を通して留学生がアイセックに入学してくるため、毎月新しい留学生が入ったり、卒業してメインストリームへ進んだり、生徒の入れ替わりはとても頻繁にあったため、様々な国籍の留学生と出会うことができた。当初、留学期間は 1 年間の予定だったが、前述の通り、自分の英語力の無さに愕然したこともあり、もっと英語を学んでから帰国したいと考えるようになった。悩んだ結果、高校卒業まで留学期間を延長することにした（後に、大学卒業まで延長することになる)。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

アデレードの観光地 セントピーターズ大聖堂

アデレード高校の日本語クラス

日本の大学受験との違いとは

オーストラリアの大学入試制度は、日本の入試制度と大きく異なり、「大学受験」という考え方はない。基本的に、Year12（高校3年生）の1年間の成績によって、入学できる大学が決まる。オーストラリアは、広大な国土や文化の多様性などに配慮する形で連邦制を採用していることから、連邦政府には、日本の文部科学省に該当するような官庁は設置されておらず、教育は各州・テリトリーに設置された教育省に委ねられている。そのため、大学入試制度も各州によって異なり、私がいた南オーストラリア州をはじめ、多くの州では、高校3年生の最終学期（11月）に、各科目の州統一最終試験がある。試験は、南オーストラリア州の学校に在籍しその科目を選択した生徒全員が同日に受ける仕組みになっている。日本の高校からオーストラリアに留学して一番驚いたことは、授業科目が全て選択式だったことである。オーストラリアでは、Year11（高校2年生）とYear12（高校3年生）は、全ての科目が選択式になり、科目はYear10（高校1年生）の時に、学校のカウンセラー、担任教諭、科目別教諭と相談しながら、自身の得意科目や将来の方向性に合わせて選択する。Year10の時に選択した科目が、前述した高校3年生の最終試験の科目に繋がるため、科目の難易度や進学したい学部のレベルとのバランスがとても重要である。オーストラリアのように、科目が全て選択式の場合、得意な分野で自分の知識・能力を伸ばすことができるため、学年もしくは科目ごとに飛び級をする生徒が多くいる。最後に、選択したyear 12の科目の最終試験での成績、学業成績（テスト・課題、授業態度）、学校の学業レベルを総合的に評価し、Tertiary Entrance Rank（TER）という得点が算出され、最終試験後の12月に発表される。TERは日本の偏差値と類似している。最高は99.9%で、自身のTERが志望する大学の学部が提示する入学基準（ボーダーライン）を上回れば、入学が可能である。私が志望した「南オーストラリア大学　健康科学部　作業療法学科」のボーダーラインは85.0%（留学生枠）だった。私は第2言語として日本語を選択して満点を獲得できたこと、そして数学を飛び級できたことが奏功し、無事にTER96.2%を取得することができ、入学が叶った。日本の大学受験も大変だと思うが、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

オーストラリアでの大学進学も非常に複雑で大変なプロセスで、入学できたときにはとても安心した。もちろん、各大学は「現地生徒枠」と「留学生枠」に異なるボーダーライン（TER）を定めており、「作業療法学科」の現地生徒枠は92.0%で、留学生枠は7.0%低い85.0%だった。英語のハンデを考慮して、留学生もきちんと進学できる仕組みになっている。

アデレードにはアデレード大学、南オーストラリア大学、フリンダース大学と、主に3つの大学があり、各大学に特徴と強みがある。私が進学した南オーストラリア大学は1991年設立の比較的新しい大学で、大きく分けてキャンパスを市内に2つ（文科系キャンパス、医療福祉系キャンパス）、市街に3つ（看護系、ＩＴ系、教育系）構えている。現在は3万人以上の学生が在籍しており、多岐にわたる専門学科を提供している。私の学んだ作業療法学科は、南オーストラリア大学のみに設置されており、物価の安さや治安の良さもあり、作業療法士への夢を叶えるため全国から学生が集まる。

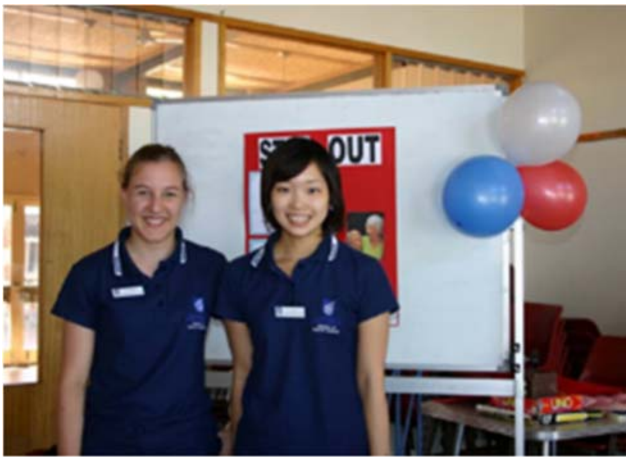
作業療法学科と大学生活

作業療法士（Occupational Therapist）は、何らかの病気や障害で食べる、歩く、シャワーを浴びるなどの日常生活に必要な基本的な動作（作業）が難しい人々のために寄り添い、リハビリテーションやカウンセリング療法を行う専門家である。作業療法学科には、入学時は約70名の学生がおり、年齢も18歳から50歳まで多様だった。アジア人、そして留学生は私ひとりだったため、「学科の選択を間違えてしまったかも」と感じるほど、とても心細かったのを覚えている。作業療法学科での授業は、日本人としては驚くぐらい授業数が少なく、1学期に4～5教科ほど、年間多くて10科目であった。授業で出欠を取ることはなく、毎授業で課される課題（アサイメント）と最終試験の結果でその教科の成績が決まる。リハビリテーションの専門家ということもあり、グループワークで取り組む課題が多く、課題を行うためには予習・復習を含めた自主勉強をきちんと行わなくては単位の取得が難しい。基本、課題提出の遅れや単位を落とした場合の救済措置はなく、作業療法学科は1年に1学期しか開講しない専門科目がほとんどであることから、その科目を落とせば1年後まで待たなくてはいけない。オーストラリアの大学への入学は簡単だが、卒業が難しいと言われる所以はそこにあると感じる。もちろん、授業の他に現場実習もあり、4年間の在学中、老人ホーム、幼稚園、精神クリニック、補助具・補装具センターなどで、1週間から6か月程の実習を行った。

私は英語のハンデがあったことから、生理学、心理学、解剖学、研究法など一般基礎科目だが英語の専門性の高い授業については、授業後や休日も自習時間に時間を費やして勉強していた。単位を落としそうになった時、勉強をしても成績が上がらなかった時、実習先の患者さんに英語のミスを指摘された時、正直なところ何度も諦めようと考えた。それでも、グループワークやレポート提出時には、留学生や第2言語を学ぶことに対して理解の深い友達に、英文をチェックしてもらうなど助けてもらったことで、4年間の大学生活を乗り越えることができた。英語力を補うために、授業の合間に

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

障害者や高齢者の自宅訪問介護のアルバイトをしたことも、自信をつけることに繋がった。4 年間の大学生活があったからこそ、様々なことにチャレンジしたいと思える今の自分があると思うと、とても貴重な経験だったと感じる。



大学 4 年作業療法実習先にて

Mt Lofty でハイキング中にカンガルーに出会う

大学からのサポートと大学への貢献

大学 4 年次が始まったばかりの 2011 年 3 月、東日本大震災が発生した。私は実習先からの帰りの車の中で、友人からのメッセージで地震が発生したことを知った。頻繁に地震が発生するため、メッセージが来た時もあまり深く考えていなかったが、家に着きテレビを付けると、とても胸が苦しくなる映像が流れていて絶句した。東北地方に親族は住んでいなかったものの、オーストラリアにいて何もできないもどかしさで心苦しくなっていた。大学は、自国が震災やテロなどの影響を受けた学生に対して、心理面でとても手厚いサポートをしてくれる。私も東日本大震災時に学生支援センターでカウンセリングを受けたことで、悲しみ・もどかしさを感じながらも授業・実習を乗り越え、その夏には福島でボランティア活動をするための一時帰国を決意することができた。

南オーストラリア大学には、在学生による大学貢献活動として、「Student Ambassador Program」があり、学生が大学を代表する学生大使として、オープンキャンパスでの広報活動、高校生と保護者向けの相談会などで活動するボランティアプログラムである。応募したところ見事大使に採用され、大学 4 年次の 1 年間、留学生代表の学生大使として活動することとなった。普段意識することのない各学部・学科の内容や、入学手続きを英語で説明することはとても苦労した覚えがある。しかし、オープンキャンパスでの受付や留学生に対する情報提供を経験したことで、英語にまだまだ不安を覚えていた自分に自信がつき、さらには作業療法学科の同級生以外の友人を作ることができた。完璧な英語ではないにしろ、失敗や恥をかくことを恐れず、様々な形で留学先の街・大学に貢献することが成長するために 1 つ重要なきっかけだと感じるプログラムであった。

上記の活動や7年間の高校と大学での成績を評価され、大学4年次に「South Australia: Governor’s

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

international students awards - academic excellence（南オーストラリア州知事留学生賞 - 学問学術の部）」を受賞することができた。この賞は南オーストラリア州内の留学生が対象となり、申請書、推薦状、業績一覧で総合評価し、4 つの部門（①Academic Excellence〈学問学術〉、②Sporting Achievement〈スポーツ〉、③Community Engagement〈地域貢献〉、④The Arts〈芸術〉（2011 年当時）で 1 名ずつ選出される。7 年間の留学を終える私にとって、大学最終年に当該賞を受賞できたことはとても感慨深いものだった。

7 年間の留学を終えて今

アデレードで過ごした 7 年間は、非常に濃密なものだった。大学を卒業し、2012 年 1 月に日本に帰国を決めた理由には、大学院への進学がある。留学初期に、英語が話せなくても部活やスポーツ活動を通じて友達が作れ、学校生活を楽しめた経験があったため、大学在籍中に障害がある方と触れ合ううちに、「障害者は運動・スポーツする機会があるのか」「運動はできないと思っている人が多いかもしれない」と疑問に思うようになったからである。帰国し大学院に在籍した 2 年間（2012～2013 年）、作業療法学科で得た障害者福祉とリハビリテーションに関する知識をいかし、障害者スポーツとパラリンピックを専門に研究を行った。国内はもちろん、海外の学識者やスポーツ関係者に対してインタビュー調査を実施し、2013 年にはベルギーで開催された学会で研究成果を発表することもできた。多くの学生・院生が英語での読み書き、発表に抵抗を感じていた中、海外の学会で発表する英語力・行動力を身に付けることができたのは、留学を経験したからだと感じている。そして大学院修了後、スポーツ団体に就職し国内・外の障害者の運動・スポーツに関する社会調査を行うまでに成長した。福祉やスポーツの分野で英語を使いこなせる人はまだまだ日本には少なく、海外留学の経験が自分のキャリアの選択肢を広げていることを改めて実感している。今後は、英語に苦手意識を感じる人々にも、留学は英語力だけではなく、自己・他者理解、向上心、行動力、広い視野を身に付けることができることを伝えていきたい。

最後に、今、私には「障害がある子もない子も共に英語・運動を学べる学習教室の開設」という夢がある。これまでの経験を集大成し、さらに自分に不足している知識（英語の教授法、英語教材の製作など）を身に付けたいと思う。この夢を見つけることができたのは、7 年間の留学で得た成果の 1 つである。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.